



さて、波乱の初日が終わって翌日。夜更かしが祟り、全員寝坊して朝食は抜き。結局、サラとフランクの二人が残りたたき起こして昼前にレストランに集合となった。当然ながら、二人以外は、まだ意識もうろうとした雰囲気だ。口数も少ない。軽いブランチを食べて、コーヒーを飲んで、ようやく復活・・・といったあたりで、サラが口を開く。

「さって、今日はどうしようか・・・っても、もうこんな時間だしねえ。一日のんびりするしかないかな」

「そうだな、みんな寝不足みたいだから、遠出も辛いだろ。明日の計画でも考えながら、ホテルでのんびりするってのがいいかもな」

フランクが言う。

「そうだ、プールいこ！、プール」

とサラ。

「えー、眠くて溺れそうよ」

美空は、本当に眠そうな顔をしている。まあ、昨夜のようなことがあれば、さすがの美空でも、あれこれ考え込んだのだろう。

「プールサイドで昼寝つてのも、なんとなくセレブっぽくてよくない？」

とサラ。

「そうだよ。部屋にいても寝ちゃうだけだし、そうしたらまた夜眠れなくなつて悪循環だからな」

「フランクもサラも、よく寝たくって、感じよね。私なんか、夕べはほとんど眠れなかったわよ。このデブが変なことするから」

「い、ごめん。でも、俺だって眠れなかったし・・・」

なんとなく気まずそうにデイクが言う。

「そりゃそうよね、あんたが熟睡してたら、首絞めてるところだわ」

「まあまあ、とりあえず一旦部屋に戻って支度してからプールサイドに集合な」

フランクはそう言うとき男子二人を促して部屋の方に歩き出し、サラも美空の肩を両手で押して部屋に戻って行った。

それから30分ほど後、5人はホテルのプールサイドに集合する。男子3人はトランクス。体格はデイクが圧倒的だ。体育会系の筋肉質。フランクは長身で割と均整が取れた感じだが、ちよつと筋肉は不足気味。アンリに至っては、まあ、天は二物を与えず・・・というのが正しいだろう。女子はというと、サラは間違いなく、周囲の男たちの目を釘付けにしている。黒のビキニからはみ出しそうな胸が悩ましい。一方の美空はいえば、サラと比べるのがそもそも間違いな、どちらかといえば未成熟。多少上げ底気味な水着でも子供っぽく見えてしまうのが、ちよつと残念。

「よし、全員集合したな。と言っても、あとは適当に・・・だけどね」

フランクはそう言うとき、準備運動を始める。

「あれ、泳がないのか？」

いきなりデッキチェアに腰掛ける女子二人を見てフランクが言う。

「わかってないねえ。大人の女はこうするのよ」

サラが、人差し指を立ててウインクしながら言う。美空はちよつと不機嫌そうに帽子を顔にかぶって寝そべってしまった。

「はいはい。まあ、ここなら日焼けもしないからいいか」

月の、しかも夜側だ。いくら明るいと言っても地球の光だけでは足りないので、可視光と赤外線照明が加えられているのだが、当然ながら日焼けすることはない。昼側の時は、逆に強烈な太陽光をシールドが適当に弱めて紫外線もカットしてくれるので、これまた日焼けの心配

はないのである。

男子たちは、思い思いにプールで泳ぎ始める。まあ、アンリの場合、泳いでいるというよりは浸かっているというのに等しいのだが。サラと美空はといえば、トロピカルドリンクを注文して、優雅なお昼寝モードといったところだ。

「でさあ、どうなの？」

サラが地球を見上げたまま、誰にともなく問いかける。

「どうって？」

「だからさ、美空はどうなの、ダイブのこと」

「……」

美空も地球を見上げながら、なにやら小声でつぶやく。

「ややこしいのよ、いろいろと……」

「ややこしいって？ まあ、あんまり詮索するつもりはないけど、いずれにせよ、あんまり答えを引き延ばすと気まずいんじゃない？」

「わかってるわ。わかってるけど、ちょっと時間が欲しいの」

そんな会話を男子たちは知って知らずにか、無邪気にプールではしゃいでいるように見える。だが、実は、こちらでも、その話が進行中。

「しかし、やってくれたよな。お前、本当に美空を？」

「ああ、そのうち言おうと思ってたんだけど、丁度いいタイミングだったしな」

「それじゃ、あれはお前が仕掛けたのか？」

「いや、あれは何かの間違いだ。でも、否定するものなあ……」

「なるほど、引っ込みがなくなっただと？」

「ああ、でもいいんだ。本心には違いないんだから」

「万一……ダメだったら気まずくならないか？」

「ああ、でもその時は笑って諦めるさ。あとくされは残さないよ」

泳ぎの合間に、フランクとダイブはそんな会話を交わしている。アンリは一人、じたばたと泳いで、いや、浮いているようである。そんな感じで、その日の午後は、なんとなく時間が過

ぎていった。やがて、照明が少し赤みがかった色に変わり始め、夕暮れのイメージをかもした。す。

「さて、今日はこれくらいにしようか」

フランクと男子二人がサラと美空のところにやってきて言う。

「結局、一回も泳がなかったな、二人とも」

「いいじゃない、そういう過ごし方もありじゃないの？」

「ま、いいけどな。ところで、明日の話だけど、例のツアーに行ってみるか？」

「地底探検？ いいんじゃない」

地底探検というのは少し大きかもしれないが、月には大昔、溶岩が流れて出来たと考えられる地底洞窟がいくつも見つかっている。とりわけ有名なのが、ケプラークレーター西に広がるマリウス丘の地底洞窟である。マリウス丘は嵐の大洋の北側に位置する古代の火山地帯だ。もちろん、今はもう活動していないから、冒険好きな旅行者たちの格好の遊び場になっていて、コペルニクスエリアからの観光ツアーも多いのである。大きな洞窟のいくつかは、エアシールドで密封され、空気が満たされているので、宇宙服なしでも歩くことができるから、ちよつとした探検気分が味わえるのである。これも5人が月にやってきた目的のひとつだ。

「よし、それじゃ後でフロントに寄って予約を入れておこう」

「マリウス丘洞窟って、ここからどれくらいかかるんだっけ？」

「シャトルなら1時間もかからないと思うよ」

「じゃ、ゆつくり探検できそうね。楽しみだわ」

「サラったら、子供みたいよね。迷子にならないでね」

「そう言いながら、あちこち行っちゃいそうなのは美空だったりするけどね」

「俺に言わせれば、どっちもどっちだけどな。さておき、そろそろ部屋に戻ろう。晩飯は6時だからレストラン集合な」

「了解！」

そんな感じでコペルニクスの二日目が終わる。5人は何事もなかったようにディナータイムを過ごし、部屋への帰りがけ。

「ツアーの予約が取れたよ。明日は7時半にウエスト・リム・シャトルポートに集合だそう

だから、余裕を見れば、ここを7時には出た方がいいな」

「じゃ、明日は6時に朝食だね。こりや5時起きかな。ちゃんと起きてよ！、美空」

「何言ってるのよ。いつも寝坊するのはサラじゃないの」

「いやあ、遊ぶとなると不思議と寝坊はしないから大丈夫だよ」

「まったく、都合のいい性格よね」

「まあ、どっちもどっちなんじゃないか？一応目覚ましはセットしておけよ。こっちも、アンリがちょっと心配だけだな」

「あ、大丈夫・・・だと思う。たぶん・・・」

そんな会話をしながら5人はそれぞれの部屋に戻る。それから、それぞれに翌日の準備をしたり、VUビジョンの放送を見たりして就寝時間までを過ごすのである。ちなみに、VUビジョンは、VUつまりネット経由で放送される動画番組で、直接アウトバンドで受信できるほか、壁面のスクリーンに映し出すことも可能だ。DIを使うと、サラウンド受信も可能で、視聴者参加番組を、スタジオで見ている雰囲気も味わえる。情報共有モードでは、番組への参加も可能だ。火星軌道くらいまでの距離なら、地球から放送される番組に、ほとんど遅延なしに参加ができる。

「じゃ、俺はちょっとシャワー浴びて来るよ」

フランクは、そう言うのとタオルを持ってバスルームに入っていく。

「デイブ、ちょっといいかな」

フランクがいなくなるのを待っていたかのように、アンリが口を開く。

「どうした？いきなり」

「いや、ちょっと聞いて欲しい話があるんだ」

「改まって何だ？」

「実は、美空のことなんだけど・・・」

「ん？」

「僕もね、美空を、その・・・好きなんだ」

「え？マジなのか？」

「ああ、それに美空には、少し前に気持ちを伝えてある」

「なんだったって！じゃ、俺より先に・・・告白したってことか？」

「そうだよ。でも、実は僕も返事はまだもらってないんだ」

「そうだったのか・・・でも、どうしてそれを俺に？」

「僕もデイブの気持ちを知ってしまったからね。これをデイブに伝えておかないとフェアじゃないと思ってさ。もちろん、僕も本気だし、デイブとは勝負になるからね」

「なるほど。最大のライバルが隣にいたってわけだな。こりゃ、俺も負けるわけにはいかないな」

「でも、決めるのは美空だから、どっちが勝っても恨みっこなしにしたいな」

「まあ、どっちも振られるってオチもありそうだけだな。その時は一緒に泣こうぜ」

「嫌なこと言わないでよ。確かに、その可能性は否定しないけどさ」

「まさか、フランクとか・・・？」

「それって最悪だよな」

「あはは、そうだな。でも、あいつもそうなら言いそうなものだ。それに、サラがそんな事を言ったときに、あいつは真っ先に否定したからな」

「そうだったよな。何の迷いもなく否定したよね」

「あいつ、もしかして美空じゃなくてサラを？」

「うーん、でもありえるかもしれない」

「後で聞き出してみるか？」

「やめときなよ。今はそれどころじゃないし」

「それもそうだな。でも、あれを聞いて美空はちよつと不満そうだったな。まさか・・・」

「それ、もつと最悪。ドロドロになるパターンだよな」

「そうだな。もう妄想はやめようぜ。なんか思考がどんどん悪い方へ行きそうだ」

「同感」

「ま、今は忘れて、とりあえず旅行を楽しもうぜ」

「そうだね、そのうち返事があるだろうから」

「そっちはお互い首を洗って待つとしようぜ」

普段から毎日一緒に遊んでいる、良くも悪くも腐れ縁な5人である。しかも、思春期真っ盛りの高校生となれば、こういうことも当然起きうる話だろう。それも青春、と言ってしまうのは簡単だが、当事者たちにとってはなかなか重たい話には違いない。

男子部屋でこういう会話が進行する中、女子部屋は灯りが消されていた。サラが既にかすかな寝息をたてる中で、美空はやはり眠れずにいた。アンリからの告白は旅行の数日前。別に嫌いではなかったし、正直なところ、付き合ってみるのもいいかなと思っていた美空だったが、そのことで、仲間たちとの関係がおかしくなるのではないかという不安が返事をためらわせていたのである。そこに、まさかのデイブの告白。考えてみれば、もしデイブが先に告白してい

たら、そちらに決めかけていたかもしれないと思うと、どことなく罪悪感めいたものにとりつかれてしまうのである。いっそ、どちらにも断ってしまおうかとも思うが、結果的に二人と気まぐずくなってしまう可能性だって十分あるから、これも躊躇してしまう。美空はそんな袋小路に入り込んでしまっていたのだ。

もう寝よう……。美空は頭から布団をかぶるのだが、目が冴えてしまって眠れない。昨夜も寝ていないのに、いざ寝ようとすると思えない。そんな悶々とした夜が続き、美空が眠りに落ちたのは、もう朝も近くなってからだった。



「いつまで寝てるの。起きなさいってば……」

「お願い……もう少し寝かせて……」

そんなサラの声で、やつとの眠りから無理矢理引き戻された美空である。しかし、時間はもう5時半をまわっている。

「何時だと思ってるのよ。もう起きなきや間に合わないっての！」

サラは容赦なく美空の布団を引きはがした。

「鬼いゝ、悪魔ああ……」

「なんとも言いなさい。さっさと起きないとそのまま廊下に放り出すよ」

「どうして、こんな時だけ、いつもと逆なのよ」

「あはは、そりゃこういう時だからだよ。いつものお返しもできるからね」

確かに普段、布団から出てこないのはサラの方である。附属高の寮では同室の二人。だいたいい、サラを起こすのが美空の日課なのだった。毎朝、サラの布団を容赦なく剥いでいる美空だったが、今朝は立場が逆転してしまっている。

男子部屋では、予想通り、アンリが大慌てで支度中。美空と同じで、やはりなかなか寝付けなかったようだ。とりあえずは6時過ぎにレストランに集まったものの、美空とアンリは、髪はぼさぼさ、目もうつろで、食事どころだはなさそうな感じだった。それでも、食べておかないと後が大変だからと、フランク、サラの二人が無理矢理に食事をとらせて、それから大慌てで準備をしてロビーに集合となった。

「えっと、シャトルポートってどうやって行くの？」

「表から車を拾って行こう。10分くらいのはずだよ」

「……」

美空は大きなあくび。まだ目がうつろである。アンリはちよつと復活したようだ。

5人は、ホテルのエントランスに止まっている車に乗り込んで、シャトルポートに向かう。



車は少し走ると、また地上に出た。空には少し膨らんだ地球。月の夜はまだ当分の間続く。やがて前方に、四角形の建物と尽きだしたマストライバーのカタパルトが見えてくる。折しも、小さなシャトルが空に向かって打ち出されていく。

「あそこだね。でも、意外と小さいな」

アンリが言う。

「まあ、ローカルポートだからね。シャトルも8人乗りとかで自動運転だし」

とサラ。そうこうしている間に車はシャトルポートの建物のエントランスに滑り込んだ。直前に到着した車から二人連れが降りてくる場所である。

「あれ、あの人たち……」

フランクがつぶやく。

「あれって、来的时候にルナ・トレインで一緒だった人たちじゃない？」

ようやく目が覚めてきた零囲気的美空が言う。コペルニクス宇宙港の駅で、発車間際に駆け込んできたカップルのようだ。

「そうだな。見覚えがあるよ。まあ、このあたりに来る観光客には人気のツアーだし、一緒になっても不思議じゃないよな」

ダイブが言う。5人も車を降りて、出発ロビーにあるツアーデスクでチェックインをすませる。

「フランク・リーブス様、5名様ですね。では、グループ11のシャトルにご搭乗ください。出発はゲート6番から20分後です」

「ありがとうございます」

ちなみに、こうした交通機関のチケットはもはや物理的なものではない。チケットやお金、クレジット、その他証明書に類するすべてのものは電子的に統一された形のオブジェクトにな

っっていて、各自のD Iユニットが、そのホルダーになっているのだ。この場合、D Iを通じて受け取ったチケット情報は5人で共有され、ゲートを通過するときに自動的にチェックされる。また、それを他人の視覚情報として共有することもできるので、係員に提示を要求された場合は、「見せる」ことも可能だ。また、情報はそれぞれのシステム上にもバックアップされていて、万一D Iユニットが故障した場合にも失われることはない。

「ゲート6はこっちだね」

サラが言う。シャトルポートでは、乗客が保有しているチケット情報に応じた案内が個別にアウトバンドを通じて送られてくるので迷うことはない。5人は昇降シャフトに乗って出発階に上がる。昇降シャフトは大昔で言えばエレベーターにあたる。しかし、今は、単なる光のチューブだ。乗客が入ると同時に、足元に仮想的な床が現れ、アウトバンドで行き先階を指定するボタンが表示される。これ进行操作すれば、その階まで行けるのである。床は特殊な電磁場で構成されている。これは、物質原子の周囲にある電子と同じように、力に対して反作用を生むと同時に、光の通過を妨害する。なので、スカートの姿の女性でも下を気にする必要は無い。昇降には電磁場の作用と重力、慣性制御が組み合わされているので、かなりの高速で動いても、乗っている人が加速度でよるけたりすることはない。ただ、人間は視覚によっても運動認知を行っているので、超高層建築などに使われる高速シャフトでは、側面にも電磁フィールドを作って、外の景色を消し、かわりに動きの少ない外部画像を投影したりしている。

出発ゲートフロアでは多くの観光客が搭乗を待っている。このシャトルポートからは、周辺地域に向けた小型シャトルが発着している。その多くが境界の観光スポットで、ルナトレインのカバー範囲外にある場所だ。

ゲート6の前には、さっきの2人連れが先に来ていた。どうやら、グループ11はこの2人と一緒らしい。

「こんにちは」

2人連れのほうの女がほほえみながら挨拶をする。

「こんにちは。今日はご一緒します。よろしくお願いします」

フランクがこたえる。

「ところで、お二人は一昨日の夜に同じ列車にお乗りじゃなかったですか？」

「あれ、それじゃ、あの時に同じ車両に乗っていた？」

今度は男のほうと言う。

「そうです。我々も一昨日ここに着いたので」

「それじゃ、ちよつとお恥ずかしいところを見せちゃいましたね。もう少しで乗り遅れるところでしたから」

「いや、そんなことはありませんよ。でも大変でしたね」

「ええ、この人が道を間違えて大変だったんですよ。自信ありげに行くからついて行ったら行き止まりで……」

「あ、もうその話はなしにしてくれよ」

「そうでしたか。でも、どこかでも聞いたような話だよな、それ」

と、フランクは笑いながらサラの方を見る。

「いやあ、その話はやめようよ」

とサラ。

「ところで、皆さんもシャトルが遅れたんですか？あの列車は臨時便だと聞いてましたが」

「あ、いや、それは……」

とデイブ。

「シャトルは定刻に着いたんですけどね、こちらも色々あって……」

「道に迷ったり、ちよつとより道させられたりね」

アンリが付け加える。

「そうよ、誰かが余計なことするから、酷い目に遭ったわ」

「だから、悪かったって。もうその話はやめようぜ」

美空の一言にデイクが居心地悪そうに言う。

「あはは、じゃ、そちらもアクシデントですか。まあ、旅先ではよくありますよね」

「ちよつと！、笑い事じゃないわよ。反省が足りないみたいねえ？」

「あ、いやそういうわけじゃないけど・・・」

このカップルもどうやら、女性上位らしい。でもまあ、それが一番平和だという話もあるのだが。

「お二人って、もしかして、ご夫婦なんですか？」

と、美空が聞く。それを聞いた二人は顔を見合わせて笑い出す。

「いやだ、そんなんじゃないですよ。私たちまだ学生ですから」

「そうそう。俺たち、付き合っただけでいるけど、まあ、見ての通りの感じで・・・」

「でも、仲がよさそうで、いいですよね」

「いいんだか、悪いんだか・・・ねえ」

「まったく・・・。結婚なんてしたら一生奴隷かもしれないしなあ」

「人聞き悪いわねえ。せいぜい下僕くらいでしょ」

「どっちも似たようなものだと思うけどな」

そう言いながら二人は屈託無く笑っている。この二人は本当に仲が良さそうだ。

「いいなあ・・・」

美空がぼつりと言う。もちろん、デイクとアンリがそれを聞き逃すはずはなく、一瞬、耳をそばだてて次の言葉を待つ様子だ。

「お二人は地球からですか？」

「そうです。東京からなんですよ」

「東京ですか？私も東京出身なんです」

美空が言う。

「そうなんですか。奇遇ですね。それじゃ、皆さんも地球から？」

「あ、いえ、俺たちも学生で、L2から来たんです」

ダイブが言う。

「L2って、もしかしてアカデミーの？」

「ええ、まだ附属高のひよっこですけどね」

「いいなあ、僕も中学の頃はアカデミーにあこがれてたんだよね。パイロットになりたくても、残念ながらVPIなんてものを持っていなくて、手に入れることも出来なかったからあきらめちゃった。今は、東京の大学で生体電子工学を勉強してるんだけど」

「この人がパイロットやってる船なんて私は乗りたくないわ。もう、実験と称して毎日、ロクでもない物ばかり作ってるんだから」

「そういう言い方はやめて欲しいな。結構役に立つ物も作ってると思うんだけど」

「失敗作も多いわよね。このまえなんか、寝ている間に、その日の体調に合わせた朝食を作ってくれる調理ドロイドコントローラとか言う奴を作ってくれたんだけど、次の日起きたら調理ドロイドがめちゃくちゃやって、危うく火事になりかけるわ、キッチンは散らかりまくるわで大変だったんだから」

「あ、あれは・・・VMIの情報からちよつと余計なデータを引っ張ってきちゃって、指示が混乱したわけで、だから、修正版を作って渡したのに」

「いやよ、もう二度と使わないわ。身の危険を感じるから」

「そんなぁ・・・」

「発明家さんなんですわね。僕は遺伝子工学が専門なんですけど、生体電子工学は興味があるんですよ」

話を聞いていたアンリが身を乗り出すようにして言う。

「遺伝子工学かぁ。じゃ君は、将来は宇宙船乗りじゃなくて研究者になるのかな」

「ええ、本課程に進んだら、研究部門に行くつもりです」

「そっか、アカデミーは研究分野でもトップクラスだからな。アカデミーの人たちの論文には驚かされることが多いからね」

「大学ではどんな研究を？」

「まあ、言うのも恥ずかしいんだけど、インターフェイスを経由して収集できる生体情報の分析技術ってところかな。副次的なものを含めるとVMIだけじゃなくて、様々なインターフェイスから、その人の状態を反映したデータが得られるんだ。中にはそれが何と結びついてい

るのかわからない情報もある。既に意味が分かっているデータと関連させることで、未知の情報の意味を探ろう・・・っていう遠大な研究・・・かな」

「まったくね。遠大すぎて、私には時間の無駄遣いに思えるんだけど・・・」

「なんだか面白そうですね。もしかしたら、人の意識とか無意識と関連した情報もあるかもしれないですね」

「そうそう。もしかしたら、言語を介さずに、その人の考えていることを電子的に取り出すことも出来るかもしれない」

「それ、すごく興味があります。僕も、人の抽象思考がどこから生まれてくるのかを遺伝子工学レベルで考えたいんですよ」

「私には夢みたいな話にしか思えないのよね。だいたい、外から心の中を覗かれるなんて、あんまり気持ちがいいことじゃないように思うけど」

そんな話で盛り上がりだした頃、搭乗開始のアナウンスが入る。乗客は、それぞれのグループごとにシャトルに搭乗を始めた。この小型シャトルは8人乗りで乗員はいない。すべてが自動で運行されている。通路をはさんで左右2席づつが4列並んでいるシンプルなキャビンで、物理的な窓はない。前方の壁には飛行中、外の景色が映し出される。もし広い景色が見たければD Iを使ってサラウンドビューも楽しめる。

7人は乗り込むと、思い思いの席に座る。全員が着席すると、すぐにドアが閉じてシャトルは出発準備に入る。短いアナウンスが入ると、シートホルド装置が作動して、身体が軽くシートに固定される。それから、シャトルは他のシャトルと列を作ってカタパルトへ移動、順次空に打ち出されていくことになる。

「サラ、いつものあれ、やってよ」

美空が言う。

「いいよ。じゃみんなサラウンドで情報共有かけてね」

サラはC&Iなので、様々な情報にアクセスできる。地理データベースなども含まれるから、サラウンドの画像にそれらの情報を重ねて映し出すことも朝飯前だ。それを全員で共有すれば、景色を見ながら、自分が知りたい情報を拡張現実として見ることができるのである。

「あ、よかったら、お二人もどうぞ。ガイドマップがわりに。サラウンドにして情報共有かけてください」

「なんだか面白そうだな。お願いしようか」

「サラウンドって、私ちよつと苦手なのよね。なんだか目が回りそう。でも、せっかくのご厚意だし、お願いするわ」

サラウンドモードに切り替えると、ちよつとシヤトルがカタパルトに進入するところである。

「あ、射出の時は……」

サラがそう言いかけた瞬間、景色が一気に動いた。次の瞬間、シヤトルはもう月の上空に飛び出していた。

「うわっ……」

「きゃっ……」

2人が叫び声を上げる。

「あっちゃあ、遅かったか。射出の時はやめといたほうが……って言おうとしたんだけど。大丈夫ですか？」

「なんとか……」

「ダメ……ちよつと……」

2人はだいぶ顔色がよくない。アカデミーの学生は訓練で慣れているので、射出や着陸時でもサラウンドを使うことが多いのだが、一般の人の中には気分が悪くなる人もいる。ちよつとした絶叫マシンのような激しい変化があるからだ。

「サラウンド酔いの時は、しばらく動きの少ない空に注意を向けておくといいですよ」

美空が言う。

「私、メデイカルだから、もしどうしても気分が悪かったら言ってください。基本的な対処ならできますから」

「ありがとう。だいぶ落ち着いてきたから……大丈夫……」

そんな間にもシヤトルはどんどん高度を上げていく。実はこのシヤトル自体はエンジンを持

っていない。重力が弱い月では、カタパルト、つまり電磁マスドライバーだけで十分な速度を得られる。軌道修正や着陸は、到着地のシャトルポートからの指向性磁場と機体が発生する誘導磁場を同期させることによってコントロールされるのである。万一、到着地のシステムに異常が発生した場合にシャトルが墜落しないよう、射出時には、一旦軌道速度まで加速される。これならトラブルの場合でも軌道に乗ってしまうので落ちることなく救援を待つことができるのである。誘導システムの異常ではなく、着陸カタパルトなどに異常が発生した場合も、そのまま軌道上で待機することができる。

やがて、加速が止んで、シートホールドが切れた。着席サインが消える。巡航に入ったわけだ。このシャトルの速度だと、すぐに目的地を飛び越してしまう。だから、目的地までの半分ほどを飛んだあたりで、向こう側からの指向性磁場に乗って減速しながら降下していくことになる。降下に入ればまた着席サインが点灯するわけだが、それまでおそらく10分ほどの時間しかない。

「大丈夫ですか？」

美空が彼女のところへ言って尋ねる。

「ええ、ちよつと目が回ったけど、なんとか持ちこたえたみたい。ありがとう。でも、星が綺麗だわ。どれが、どの星かわからないくらい」

彼女が見上げた空には、満天の星。地球が明るくても、空気のない月では信じられないくらい多くの星が見える。星があまりに多すぎて、星座を見つけるのも簡単ではない。次の瞬間、星空を重ねて、星座の絵が映し出された。これはサラの仕業。おそらく、星座のデータベースから持ってきたデータを重ねたのだろう。

「どう？これなら分かりやすいでしょ。あ、もし邪魔だったら消すから言ってね」

「ううん、素敵だわ。ありがとう」

彼女はサラのプレゼントを気に入ったようだ。

「そろそろケプラーの上だね。ここには、航路局の管制センターがあるんだよね」

サラが言う。サラウンドの映像上に、管制施設の位置が表示されている。彼らが月にやって



きたときにも見たケプラークレーター。コペルニクスよりも小さなこのクレーターだが、険しい外輪山に囲まれているため、大規模な施設は作りにくい。あるいは、航路局の管制施設や通信施設である。

「そろそろ降下が始まるな」

ダイブが時計を見ながら言う。目的地のマリウス丘クレーター群はもう目と鼻の先だ。そろそろ目的地の指向性磁場に乗る時間帯である。もうしばらくすれば、着席サインが点灯するだろう。ここまでは順調な飛行だったのだが……。